

オーストラリアのジョン・レディ・ブラック : 「 Black and Wright 社」の発見その他

著者	奥 武則
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	57
号	4
ページ	269-290
発行年	2011-03
URL	http://doi.org/10.15002/00021101

オーストラリアのジョン・レディ・ブラック

——「Black and Wright 社」の発見その他——

奥 武 則

はじめに——近代日本ジャーナリズムの父

ジョン・レディ・ブラック John Reddie Black (1826~1880) を「近代日本ジャーナリズムの父 the father of modern Japanese journalism」と“命名”したのは、花園兼定であった。1926年に刊行された英文の著作 *Journalism in Japan and its Early Pioneers* の中である¹⁾。90年近くも前の著作の中でこの表現に出会い、はるか後代のジャーナリズム史研究者として、一種の感慨を覚えずにはいられなかった。

ブラックは正しく日本が「近代」と呼ばれる時代に走り出したばかりの時期、身をもって「近代国家」に不可欠な存在としての「ジャーナリズム」のあり方を示した人物である。私は花園とともに、ちゅうちょなくブラックを「近代日本ジャーナリズムの父」と呼びたい。

なぜ、そう考えるのか——。その前提には「ジャーナリズム」をどのように定義するかという問題があり、ここでは、次の事例を紹介するにとどめる²⁾。

英国スコットランドで生まれたブラックの来日時期は不明である（補注）。明治5年3月17日（1872年4月24日）、日本語新聞『日新真事誌』を創刊する。同年12月、左院との間に全10条付則2項からなる協定を結び、「左院御用」を題字とともに掲げた。左院は明治4（1871）年、太政官制改革に伴って新設された立法に関する諮問機関である。一般からの建白も広く受け入れた。協定によると、『日新真事誌』は3年間に限って、左院の議事・布告・建白書などの独占的掲載と西洋語への翻訳が認められた。左院は同紙を毎号20部買い上げることにもなっていた³⁾。

政府機関の「御用」ということでは、すぐに「御用新聞」という言葉が思い浮かべる人がいるだろう。「政府の言いなりになって、その政策を宣伝する新聞」といった意味で、批判的な文脈で使われることが多い。しかし、新聞草創期にあっては、政府機関の「御用」となることは、新聞の権威を高めるものだった。そしてブラックの『日新真事誌』は、「左院御用」であることを有効に活用してジャーナリズムの機能を発揮した。

その最大の事例が、1874（明治7）1月18日紙面に「民撰議院設立建白書」を掲載し、その後、紙面で「民撰議院論争」を喚起したことである。前年、いわゆる「征韓論」をめぐる政変で参議を辞職した板垣退助、副島種臣、後藤象二郎、江藤新平らを含む8人は、この年1月17日、「民撰議院設立建白書」を左院に提出した。『日新真事誌』はこれを翌日の紙面に掲載したのである。さらにその後、民撰議院（国会）開設をめぐる賛否の論説や投書を積極的に紙面化し、各紙もそれに従

った。板垣らの建白書提出は、国会開設を求める自由民権運動の端緒とされる。だが、実のところ、ブラック率いる『日新真事誌』のこうした活動があったからこそ、自由民権運動は動き出したのだった。

今日、この「父」は忘れられてしまったというわけではない。むしろ正当に“顕彰”されているといってもいいかもしれない。ちなみに1昨年刊行された『近代日本メディア人物誌——創始者・経営者編』⁴⁾を開いてみる。人物を通してメディア史の入門的理解をめざした本である。帯に「日本のメディアを創った人物の群像」とうたっている。全体で29人が取り上げられていて、ブラックは「第1部 黎明期のメディアを創った人々」14人の1人として登場している。そのほかは、福地桜痴、仮名垣魯文、福沢諭吉、村山龍平、黒岩涙香、陸羯南、徳富蘇峰、本山彦一らである。今日、近代日本のメディア史を語るとき、ブラックはこれらの人々とともに逸することのできない人物として、その評価は定着しているといっていだろう。

同書でブラックを担当した浅岡邦雄は、冒頭で彼の生涯を紹介している。ブラックについて「なじみのない」読者の便宜も考慮して、次に引用しておく。

1826年1月8日英国ファイシャーのダイサートに生まれる。結婚後オーストラリアに移住、帰国の途次日本に立ち寄り、横浜で新聞事業に関与。『ジャパン・ガゼット』他を刊行後、1872年念願の日本語新聞『日新真事誌』を創刊した。草創期新聞のリーダーとなるが、政府の陰謀から「左院」お雇いとなる。1876年『万国新聞』を発行するも即発売停止。1880年『ヤング・ジャパン』執筆。完成を見ずに54歳の生涯を閉じた⁵⁾。

このように概括されているブラックの生涯だが、その伝記的事実は必ずしも明らかになっているわけではない。とりわけ幼少時から来日以前に関しては不明な部分が多い。その結果、今も「来日以前のブラックの生育歴および活動については、断片的なことしか判明しておらず、詳細は詳らかでない⁶⁾、あるいは「約9年にわたるオーストラリア滞在中の活動については不詳で……」⁷⁾といったように記述されている。

私は「近代日本ジャーナリズムの父」であるブラックの包括的評伝を執筆するべく、この間史料調査などを続けてきた。来日以前のブラックに関しては、オーストラリア移住前までの時期に関して、その成果のいったんを別稿⁸⁾にまとめた。本稿はオーストラリア移住以後のブラックに関して新しく判明した事実を中心に記したい。もとより「全容」を明らかにするにはほど遠い「断片」にすぎない。だが、伝記の「空白」をいくぶんか埋めることにはなるだろう。

1 移住以前——結婚まで

ブラックに関する最初のまとまった文献は『十大先覚記者伝』⁹⁾と思われる。1926年3月21日、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社の発行（東京日日新聞社は大阪毎日新聞社が東京に進出するに際

して買収した新聞社である)。著者は大阪毎日新聞社編集顧問(元東京日日新聞副主幹)の大田原在文。大阪毎日新聞社社長の本山彦一が「序」を寄せていることから分かるように、同社の「先覚記者」顕彰事業の一環として刊行された。同書は来日以前のブラックの履歴について、次のように記している。

ブラックはスコットランドに生れ、少年時代の教育をロンドンのクライスツ・ホスピタルで受け、後にブルー・コート・スクールを出て、彼の家代々の慣習により海軍士官になったのである。しかし彼は海軍士官として栄達するに至らなかったから、豪州にあって商業を営み、此処で石井ブラックを産んだのである。後商業にも失敗したので、帰英せんとて途中日本に立寄ったのであるが、日本の風土と日本人とが大層彼の気に入ったところから、彼はその余生を日本で送ることを決心した¹⁰⁾。

この記述の中で「クライスツ・ホスピタル」と「ブルー・コート・スクール」が別のものになっているのは誤りで、Bluecoat School は、その制服の色から付けられた Christ's Hospital の別名である。クライスツ・ホスピタルは「病院」というわけではなく、もともと1552年に慈善基金をもとに創立された「救貧学校」である。クライスツ・ホスピタルの歴史や同校とブラックのかかわりの詳細に関しては別稿に譲るが、ブラックは1833年、すでに「救貧学校」から独自の教育機関に発展していたクライスツ・ホスピタルに入り、1841年1月8日、15歳の誕生日に同校を退学している。

15歳で退学せずにさらに上級クラスに進み、オックスフォード大学やケンブリッジ大学のカレッジに入った者¹¹⁾もいるが、ブラックはその道をめざさなかつたらしい。しかし、クライスツ・ホスピタルでの教育はラテン語の書法や古典、算術などが中心で、ブラックは少年期に当時であつてもっともレベルの高い教育を受けたといつていい。

クライスツ・ホスピタル退学後、ブラックはいかなる人生を歩んだのだろうか。従来、すでに引用した『十大先覚記者伝』が記すように「彼の家代々の慣習により海軍士官になった」と考えられていた。この点では浅岡邦雄の最新の記述も「その後海軍士官の道を進み……」¹²⁾とブラックが海軍士官になったことを自明のこととしている。だが、実のところ、その確証はない。私は、別稿で、ブラックが海軍士官だったことがないのはもちろん、海軍士官の道を選ぶことはなかつただろうと結論した¹³⁾。いまその推論過程を繰り返すことは避ける。

クライスツ・ホスピタル退学後のブラックの足跡を知る史料は乏しい。1841年のイングランド・センサスによれば、スコットランド生まれで、当時15歳のジョン・ブラックなる人物がグリニッジ(グリニッジ・ウエスト)に在住している¹⁴⁾。ジョン・レディ・ブラックは、グリニッジ在住の母方の伯母メアリー・ハーディスの家からクライスツ・ホスピタルに入ったことが分かっている。センサス類の記録には、ミドル・ネームが記載されていないケースは珍しくないので、年齢と出生地を考えると、このジョン・ブラックはジョン・レディ・ブラックその人である可能性が強い。だとすると、やはり、クライスツ・ホスピタルを退学した後、ブラックは海軍士官の道をめざすこと

なく、そのままグリニッジに戻ったことになる。

1851年センサスには、まちがいなくジョン・レディ・ブラックが登場している。住所は先のジョン・ブラックと同じグリニッジ・ウエストで、出生地はスコットランド・ダイサートと明記されている。年齢は25歳。ジョン・レディ・ブラックその人である。

ブラックは「Head」と記されていて、同居人として、「Father」と記載された同名のジョン・レディ・ブラックがいる。年齢は63歳。出生地はやはりスコットランド・ダイサートである。父ブラックの「Rank, Profession or Occupation」欄の記載は「Lieutenant R.N. (Half Pay)」とはっきり読み取れる。艦船勤務を離れ、半給が支給されていた海軍 (Royal Navy) の Lieutenant (大尉) だから、父ブラックの年齢・履歴にぴったりと符合する¹⁵⁾。もう1人、Arthur Berun Beet という名前の同居人がいて、これは「Visitor」とある。ブラック本人の「Rank, Profession or Occupation」欄の記載は残念ながら最初の語が読み取れないのだが、後は「(……) Merchant & General Agent」と解説できる。

クライスツ・ホスピタルを退学してちょうど10年たった時期である。ブラックは故郷に帰ることなく、おそらくは一定の「修業期間」を経て、この時期にはグリニッジで何らかの商売を行い、合わせてAgentとしての仕事¹⁶⁾を営み、すでに一本立ちしていたことが分かる。

1851年センサスに姿を見せたブラックが次に史料に登場するのは翌々年1853年である。この年11月10日、ケント州スワンズコーム Swanscombe の教会で、エリザベス・シャーロッセ・ベンウェルと結婚する。ブラック27歳、エリザベス24歳¹⁷⁾。この結婚については、General Register Office の結婚証明書を得たほか、ロンドンで発行されていた新聞 *The Morning Chronicle* 1853年11月14日付「MARRIED」欄でも確認できた。同欄によると、エリザベスは故ヘンリー・ベンウェルの長女である。

結婚証明書の記載によると、2人の住所はともにグリーンヒザGreenhithe になっている。グリーンヒザは1851年センサスでブラックの居住が確認されたグリニッジから東に150キロほど離れたケント州ダートフォードに属する町で、テムズ河に面し、古くから船舶の発着地として知られる。この時期、ブラックはおそらく商売と General Agent としての仕事の便宜上、グリニッジからテムズ河口のこの町に移っていたのだろう。2人が結婚したスワンズコームはグリーンヒザの東に隣接する町で、両地区を統括する教区教会はスワンズコームにある。

結婚証明書のブラックの「Rank or Profession」欄には職業の記載はなく、「Gentleman」とだけ書かれている。ここで「Gentleman」というまでもなく、成人男性一般に対する呼称ではなく、まさに「Rank」を示す呼称である¹⁸⁾。エリザベスの父ヘンリー・ベンウェルは「Surgeon」とある。外科医だったようだ。ブラックとエリザベスが結婚するに至ったいきさつは不明だが、同じ地域に住んでいたのだから、何らかのかたちで「出会い」があったのだろう。

ブラックが妻エリザベスとともにオーストラリア・アデレードをめざしてロンドンを船出するのは、結婚からわずか8カ月後の1854年7月26日のことであった¹⁹⁾。エリザベスは一時帰国した時期があるが、ブラックにとっては、この出立は2度と故国の土を踏むことがない船出となった。

2 アデレード——「理想の植民地」

アデレードは今日、南オーストラリア州の州都として人口約130万人を擁するオーストラリア屈指の大都市である。だが、都市としての歴史は、ただか180年ほど前にさかのぼるにすぎない。そして、「都市・アデレード」は、オーストラリアの他地域とは違う特異な歴史を持っているのである。

先住民アボリジニの歴史を別にして、今日の「白人国家」Commonwealth of Australia がイギリス本国からの「流刑植民地」として始まったことはよく知られている。ジェームズ・クックらがシドニー南方のボタニー湾に到達し、オーストラリア大陸東海岸一帯の領有を宣言したのは1770年4月20日のことである²⁰⁾。1780年代になると、イギリスは、エンクロジャー（土地囲い込み）による土地喪失者、産業革命の進展による失業者などが都会にあふれ、犯罪者の数も激増した。「巨大な流刑地」でもあったアメリカは1776年に独立し、新たな流刑地の確保が政府の重要課題となる。こうして、流刑者を中心にしたシドニーへの入植が始まり、やがてニュー・サウス・ウェールズ地域の開発が進んだ。

アデレードはこうした「流刑植民地」としての歴史を共有しない。アデレードは「思想」に基づく自由な植民者たちによる「理想の植民地」をめざして建設が始まったのである。「理想の植民地」を築くことによって、人口過剰などイギリスがかかえるさまざまな社会問題が解決できるという「思想」を提唱し、その具体的な場として南オーストラリアへの入植を広く訴えたのは、エドワード・ギボン・ウェークフィールド（1796～1862）だった。「体系的植民地化 systematic colonization」という言葉が、彼の「思想」を端的に示しているだろう²¹⁾。彼の「思想」とそれに基づく「運動」は曲折を経つつ、1834年、南オーストラリア植民法として結実する²²⁾。

1836年以降、「自由移民」として入植者がアデレードの地に入り、「都市・アデレード」の歴史がスタートする。トーレンス川を挟んで南と北に分けられて、見事に区画された道路が縦横に走る都市プランに基づき、土地が分譲された。1837年には「暑い夏の陽光に焼かれたユーカリの木と草原の下に入念に配置された測量用の杭が列をなしているだけだった」²³⁾地は急速に発展していく。この年11月には人口は約2,500人になり、1.5ヘクタールの農地が開墾された²⁴⁾。1851年にビクトリア州で金鉱が見つかったことをきっかけとして、オーストラリアはいわゆるゴールド・ラッシュの時代を迎える。金を求める人々が集まり、人口が急増したメルボルンへの物資供給などで、アデレードも間接的に大いに繁栄した。

ブラックはどのようにしてアデレードのことを知ったのだろうか。そして、いつ移住を決めたのだろうか。残念ながら、これらのことを知る史料はない。ただし、イギリスでの商売に失敗し、アデレードに新天地を求めたという推測は許されるだろう。この推測に根拠がないわけではない。

1880年6月11日、横浜でブラックが死去した後、ブラックにとってはついには戻ることのなかった故郷スコットランド・ファイフの新聞は、日本で出ていた英字新聞 *The Japan Herald* の記事を全文引用して「DEATH OF A DYSART MAN IN JAPAN」を報じた (*Fifeshire Advertiser* 1880年

6月31日)。そこには、*The Japan Herald* の記事以外に注記があって、「彼はオーストラリアに向けてイギリスを離れる前、ロンドンで代理店 commission agent として事業 business を始めたが、その投機は失敗に終わり、約2,000ポンドの世襲財産 patrimony を失った」と記されている。

ブラックがオーストラリアに移住した1854年、父は存命だから、約2,000ポンドの世襲財産はいわば「生前贈与」のかたちで父から受け取ったのだろう。2,000ポンドを今日の貨幣価値に換算するのは難しいが、日本円の感覚でいえば、数千万円以上には軽くなるはずだ²⁵⁾。

この点で興味をそそられるのは、先に紹介したブラックとエリザベスの結婚証明書である。結婚の証人として4人の名前が書かれているのだが、名前からみて、いずれも「新婦」側の人間である。この2年前には息子と同居していた父ブラックはすでに故郷ダイサートに帰っていたと思われる。ブラックの母親は1846年に死去しており、故郷に戻った父ブラックは1852年7月5日、42歳も年が離れたエマと再婚する。改めて年次をたどると、ブラックがエリザベスと結婚したのは父の再婚の翌1853年11月10日、ブラックがオーストラリアに移住したのは、そのまた翌1854年7月26日だった。「2,000ポンドの世襲財産の喪失」という状況も背景におけば、こうした経過に父と息子の間のただならぬ葛藤を読み込むことができるように思える。

父の間におそらくは溝が生じ、かつ事業は失敗に終わった。新妻とともに新しい生活に踏み出したばかりのブラックは、あるとき、「理想の植民地」をうたって急速に発展しつつあったアデレードのことを耳にしだろう。ゴールド・ラッシュに伴う繁栄のうわさも「夢」を膨らませることになったかもしれない。事業に失敗したとはいえ、まだ彼は28歳だった。アデレードが希望の新天地に見えたとしても不思議ではない。

ブラック夫妻と使用人女性を乗せたアイリーン号 Irene の船室の乗客は *The Adelaide Times* によれば20人である。ブラック夫妻を含めて夫婦は4組。子ども1人と使用人を伴っている夫婦が1組いる。Dr の称号を持つ1人を含めて単身男性が5人、独身女性が3人、既婚女性1人。

アイリーン号が接岸したアデレード港からアデレードの町まで約15キロ。この間の鉄道が開通するのは1856年4月19日だから、ブラック夫妻と使用人の女性は、馬車でアデレードの町に入っただろう。ブラックがアデレードに到着した3年後、1857年のデータによると、南オーストラリアの人口は109,917人に膨れている。その大半はアデレードないしその近郊に住んでいた²⁷⁾。

しかし、急速に膨張する植民地都市は、おそらくすでにウェークフィールドが考えた「理想の植民地」からかけ離れたものになっていただろう。ブラックのアデレード到着の前年1853年にこの地に入植した C. H. パートンなる若者は、同年12月、妹に宛てた手紙の中で次のように書いているという²⁸⁾

だっ広い道路に砂と舞い上がるワラ屑がばらまかれた、めまいがするような、ほこりまみれの町。たばこやブランディーの匂いがただよう、ひんやりとする夕方の冷氣の中、植民地人たちはあちこちに立ち、笑い、話をし、歌を歌っている……白いパナマ帽をかぶった険しい顔の団がすべての酒場に押し寄せる。……ここには安酒場があふれかえっているのだ。

「自由移民」とはいえ、本国で何らかの蹉跌を経験した末、はるか離れたこの地に渡ってきた人々だったにちがいない。なけなしの金をはたいて渡航して、一攫千金を夢にみる者から、すでに金脈を当てた成金まで、そこは露骨な夢と欲望がうずまく世界だっただろう。そんな中で、やはり蹉跌を経験した1人だったブラックは、どのように生きていったのか。

3 「Black and Wright 社」——船出

オーストラリア移住後のブラックに関して従来明らかにされていたことは、ほぼ長女の誕生と死亡、長男の誕生という事実尽きる。これらの事実を改めて確認するために、南オーストラリア州の公式記録の複写を得た²⁹⁾。長女 Annie は1856年8月29日に誕生し、翌57年1月11日、死亡している。生後5カ月に満たない短い命だった。死因は「fever」（熱病）と記載されている。長男 Henry James は1858年12月22日生まれ。彼は後年、明治の日本で落語家・快楽亭ブラックとして活躍する。こちらの方の記録には「Rank or Profession of Father」の欄があり、「Merchant」と記されている。住所は「Enfield」Enfieldは現在の北アデレードに、その名の地域がある。

長女の誕生に関しては、二つの新聞史料もある。一つは1857年1月3日付 *Caledonian Mercury* , もう一つは1857年1月2日付 *The Morning Chronicle*。ともに「BIRTH」欄に、南オーストラリア・アデレードの「Enfield-House」で、ジョン・レディ・ブラック夫人の娘が生まれたことを記載している。*Caledonian Mercury* はエディンバラ、*The Morning Chronicle* はロンドンの新聞である。はるか離れたアデレードでの誕生記録が、このような新聞にまで載っていることにいささか驚く。

ブラックのオーストラリア在住は1854年から7年以上に及ぶと考えられる。「Merchant」として、いったいどのような仕事をしていたのか。従来、「商業活動に従事したが成功せず、金鉱のコンサート歌手をしていたとも伝えられる」³⁰⁾といったように、きわめて漠然としか記述されていない。具体的な活動を知りたい。以下、知りえた事実を調査経過も含めて概述したい。

何か手掛かりは得られないかと、オンラインで検索できるオーストラリア国立図書館の新聞データベース <http://trove.nla.gov.au/ndp/del/home> に注目した。アデレードで発行されていた新聞で、ブラックのオーストラリア在住期を含めてデータベースになっているのは、*South Australian Register* (1839年～1900年) だけである。さまざまかたちでこのデータベースの検索を繰り返した結果、意外なところに探索の入口が見つかった。

破産事件の処理をめぐるいくつかの法廷記事の中に「Messrs. Black and Wright」という会社が出てくるのを見つけた。ビール製造会社が破産して債権者が債権支払いを求めて起こした裁判に関する記事で、「Messrs. Black and Wright」は、債権者の1人として登場している。「Messrs.」は、この場合、日本語で表記すれば、「〇〇社」の「社」に当たる。つまり「Black and Wright社」である。ブラックとライトという2人の人物が共同で経営している会社と考えられた。

もっとも「ブラック」は特に珍しい名前ではないから、これだけでは、この共同経営者の1人が、

ジョン・レディ・ブラックであるとはむろん断定できない。ところが、いくつかの関連記事の一つに、ブラックとライトのフル・ネームが出ていたのである。1857年3月21日付 *South Australian Register* の3ページに載った記事に、「Black and Wright社」の経営者が、アデレードの「John Reddie Black」と「Jonah Richard Wright」であることが明記されていた。ファミリーネームの「Black」以上にファーストネーム「John」はありふれているが、「Reddie」は相当に珍しい。わがジョン・レディ・ブラックは、オーストラリアでライトなる人物とともに「Black and Wright社」を経営していたと考えてまちがいないだろう。

この「Black and Wright社」の発見が、オーストラリアにおけるブラックの事業活動に関して多くのことを教えてくれることになった。*South Australian Register* の紙面に「Black and Wright社」はさまざまなかたちでたびたび登場しているのである（多くの場合、「Messr.」は冠されていないで、「BLACK & WRIGHT」の表記）。

まず「初出」である。1854年12月2日（以下、断わりのない限り、日付は *South Australian Register* のもの）の広告欄に「BLACK & WRIGHT」は「はなばなしく」といい感じの感じで登場している。実質的に「創業広告」であり、「開店大売り出し」といったところでもあっただろう。

広告欄の9つの枠を連続的に使って売り出されているのは、エール (Pale ale)、黒ビール (Porter) 各250樽をはじめ、赤ぶどう酒、シェリー酒、ブランディー、香水、オーデコロンなどである。中でも、大量のエール、黒ビールは「主力商品」だったようで、大きな枠を割いて特に質の良さを強調した宣伝文を載せている。「BLACK & WRIGHT」の所在地は「Office—5 Exchange-buildings. Store—Currie-street」となっており、事務所と店舗を別に構えている。

この大広告は、翌2日から日曜日で新聞が発行されなかった3日と10日をのぞいて、16日まで実に連続13回掲載されている。最初の12月2日は、ブラックがアデレードに上陸した10月29日からほぼ1カ月後のことである。ブラックのアデレード到着以前には「BLACK & WRIGHT」の広告は存在しない。

こうして「Black and Wright社」を発見した後、改めて、ブラックのアデレード到着を伝える「SHIPPING INTELLIGENCES」を見てみると、見逃していたことに気づく。先に乗客の内訳を記した。単身男性5人の1人は「Mr Wright」なる人物である。また、「IMPORTS」欄に内容が載っているアイリッシュ号の積荷の中に、「Black and Wright」を荷主にする積荷が二つ（「21 cases」と「6 cases」とあるだけで、中身は分からない）含まれていた。

「Mr Wright」はフルネームが書かれていないので、「Black and Wright社」のライトであるかどうか分からない。だが、積荷の荷主の方は、広告欄の「BLACK & WRIGHT」と考えてまちがいないだろう。先の広告の中には「EX IRENE」とアイリッシュ号の積荷だったことをうたっているものもある。合計27ケースの積荷は大々的な広告を打つことになった商品だっただろう。そうしてみると、「Mr Wright」も「Black and Wright社」のライトと考えるのが自然だろう。つまり、ブラックと共同経営者のライトはすでに渡航前に会社を立ち上げていて、自分たちが乗船する船に商品を大量に積み込み、上陸後、すばやく事務所と店舗を借り、先の大々的な「創業広告」「開店大売り

出し」の宣伝を展開したのである。

ともにアデレードに渡航してきただろう可能性が高いブラックの共同経営者ライトについては、先に記したフルネーム Jonah Richard Wright が、正しくはRichard Joseph Wrightであるということ以外はいまのところまったく不明である³¹⁾。

1855年1月に入ると、2日、3日、4日、6日に「BLACK & WRIGHT」の商品広告が掲載されている。12月の大々的の広告と打って変わって、1枠（それもごく小さい）だけで、商品は「MALT」とある。モルト（麦芽）は大麦の芽を発芽させたもので、ビール製造に使われる。

2月から3月にかけては、3回、広告が載っている。エールのほか、ポルト、シェリー酒などの酒類のほか、香水、新しいところでは本やナイフ・フォーク類と思われる「Tools」「Cutlery」など雑貨品も含まれている。前年12月の「開店大売り出し」の広告からみて商品は酒類が中心と思われたが、扱ひ商品は特に酒類に限っていたわけではないようだ。4月には4枠分の同じ広告が10回掲載されていて、モルトのほか、spout（黒ビール）、spirit（ウイスキーあるいはブランデーか）と、やはり酒類が並ぶが、一つの枠のメイン商品は「ELECTRO PLATE」である³²⁾。

6月から7月には「HOPS」の同じ広告が6月に23回、7月に13回載っている。ホップはビールの芳香苦味剤として使われる植物である。ブランディーの同じ広告が7月に2回、8月に13回。売れ行きが芳しくなかったのか、それとも商品の量が多かったせいかわからないが、まったく同じ内容の広告が繰り返し掲載されているのが目立つ。

この間、「Black and Wright 社」の消息を教えてくれる情報が、5月23日の「MERCANTILE NOTICES」に載っている。当初、事務所を構えていたCurrie-street から Grenfell-street への移転を通知したものである。クリー・ストリートもグレンフェル・ストリートも今日の南アデレードに、その名を見つけることができる。南アデレードは道路が基盤の目のように整然と縦横に走っている。二つのストリートは南北を走る中心道路キング・ウィリアム・ロードと交差して東西を走る基幹道路の一つで、キング・ウィリアム・ロードと交差した東側がグレンフェル・ストリート、西がクリー・ストリートである。アデレード駅に近く、当時も今もアデレードの中心街の一角といっている。

この「移転通知」による、「Black and Wright社」は「GENERAL MERCHANT and COMMISSION AGENT」である。後者の仕事内容はこの段階では明らかになっていないが、後に記すように、代理店業務をまもなく手広く展開することになる。

さて、その後の「Black and Wright社」の商品広告を見ておこう。6月から8月にかけて、同じ商品だったとはいえ、「露出度」が高かった同社の商品広告は10月16日のモルトの広告を最後に消えてしまう。ふたたび見出すことができるのは、翌1856年9月である。同月内にモルトの広告が7回と「HYDARULIC PRESS」の広告が5回出ている。後者はどんなものかわからないが、水道工事に使う何かの機械ではないかと思われる。

以後、商品広告を見出すことはできない。しかし、この後すぐに述べる輸出入業務の状況から考えて、この商品広告の「消滅」は、「Black and Wright社」の仕事がうまくいかなかったということではないことはたしかである。到着直後の大々的な商品広告は、まだアデレード経済社会に認

知されていない会社として当然のことだっただろう。その後、この地の経済社会にたしかな位置を占め、特定の大口顧客とのルートが確立するとともに、一般の顧客を対象にした新聞での商品広告は必要がなくなったのである。

新天地を求めてはるかアデレードの地に渡ってきた若きブラックは、家庭的には間もなく長女の夭折という不幸を経験することになるものの、仕事を順調に発展させていたと考えていだろう。

4 「Black and Wright 社」——頂点

South Australian Register の商品広告から「BLACK & WRIGHT」が消える時期と相前後して、今度は「SHIPPING INTELLIGENCES」欄にその名がたびたび登場するようになる。この「船舶情報」欄はいくつかのサブ見出しが付いた欄で構成されていて、その中に「EXPORTS」欄と「IMPORTS」欄がある。前者は出港した船の積荷、後者は入港した船の積荷を、それぞれ出荷者と荷受者とともに記している。次に輸出と輸入に分けて表にまとめた。それぞれ輸出の出荷者、輸入の荷受者に「Black & Wright」と出ている分を拾ったものである³³⁾。さまざまな「単位」呼称があって分かりにくいのだが、1855年後半以降、急速に「貿易商社」として活発に活動するようになった「Black and Wright社」の姿をとらえることができるはずだ。

《輸出》

年	輸出先	品目・量
1855年		
2月5日	ゴール	1box gold(£80)
3月9日	メルボルン	30baores candles
6月30日	メルボルン	42cans oil
8月2日	メルボルン	50bores candles
11月30日	メルボルン	87casks bottled beer
12月3日	メルボルン	194casks bottled beer
12月5日	メルボルン	129casks beer
12月8日	メルボルン	368cases beer
12月12日	メルボルン	250cases beer
12月19日	メルボルン	29casks beer 420pkgs beer
1856年		
1月3日	メルボルン	280bags flour
1月9日	メルボルン	1case samples
1月11日	メルボルン	100bags flour
1月18日	メルボルン	100bags flour
1月19日	メルボルン	104cases beer
1月28日	メルボルン	13bags flour 146casks beer
2月4日	メルボルン	175bags flour 54bags bran
2月7日	メルボルン	60bags flour

2月15日	メルボルン	200bags flour
2月18日	メルボルン	100casks beer
2月19日	メルボルン	100bags flour
2月27日	メルボルン	300bags flour
3月3日	メルボルン	211bags flour
3月19日	メルボルン	50boxes candles
4月9日	メルボルン	4cases
5月15日	メルボルン	4 cases boots 1 hoes
8月29日	メルボルン	260bags flour
11月13日	メルボルン	700bags flour 94bags bran 24qr-casks wine
12月20日	メルボルン	500bags flour 80bags bran 28qr-casks wine

1857年		
1月6日	ロンドン	219bales wool
1月8日	メルボルン	91casks beer
1月19日	メルボルン	200bags flour 56bags bran
1月26日	メルボルン	108pkags beer
2月12日	メルボルン	153firkinings butter
3月17日	ロンドン	1box apparel 1case furniture 4boxes wine
4月9日	メルボルン	2cases
4月10日	メルボルン	25tons bran 19hhds brandy
5月5日	ポートランド	1case picutures
5月18日	メルボルン	15tons flour 30tons bran
5月27日	ロンドン	71bales wool 15casks tallow 21bales wool
5月30日	メルボルン	9tons bran 5tons bran
6月1日	メルボルン	10tons bran
6月3日	メルボルン	125boxes tinplates
6月10日	メルボルン	30tons bran
6月12日	メルボルン	300bags flour
6月17日	メルボルン	20tons bran
7月4日	メルボルン	15tons bran
10月5日	メルボルン	15tons flour 30tons bran
12月19日	ロンドン	6cases wine

1858年		
2月2日	ロンドン	90bales wool 5tons bark
4月30日	シドニー	211qrs wheat

《輸入》

1855年	輸入元	品目・量
5月15日	メルボルン	10cases cigars
6月27日	メルボルン	3cases cigars
8月13日	ロンドン	16bales 1case 13 cases
9月21日	ロンドン	200 cases
10月2日	ロンドン	28cases
10月4日	メルボルン	1parcel

11月6日	ロンドン	121cases 26crates 120boxes 58cases 1malt bin
12月17日	メルボルン	20casks pearl barley
1856年		
1月8日	ロンドン	275casks 400cases 1bin
1月21日	ロンドン	40cases 17cases 1bin
2月19日	ロンドン	73cases
2月29日	ロンドン	1cases 2casks 5cases
4月14日	ロンドン	76packages 2cases
5月31日	シンガポール	4boxes opium chairs
6月26日	ロンドン	2cases 2cases
8月6日	シドニー	9tons potato
8月18日	ロンドン	8casks 149cases 2casks
9月2日	ロンドン	1bin malt 14pkts hops 2cases
9月16日	ロンドン	300cases 1bin malt
9月25日	ロンドン	120cases
10月13日	ロンドン	70hhds 20qr-casks 1bin malt
11月1日	ロンドン	164tons coals 61bags coffee
11月6日	ロンドン	8tierces 5casks 340barrels 2chests 126pkgs 6cases 21sheet lead 16pkgs
1857年		
1月12日	ロンドン	1bin malt 11bales 300kegs 680boxes 15pockets 125casks
1月19日	ロンドン	411cases 450casks
2月11日	メルボルン	60tons coals
2月24日	ロンドン	36pockets 1malt bin 892camp ovens 20cases
4月20日	ロンドン	11pkgs 177pkgs
4月21日	ロンドン	2cases 11pkgs 1tierce
5月5日	ロンドン	50tons coals 250qrs malt
5月26日	ロンドン	2cases
6月18日	ホーバートタウン	50tons salt 74,850 5feet paling 4chests 4casks lead 3bdls
7月18日	シドニー	64tons coals
7月28日	ロンドン	1cases 50tons coals
8月5日	ロンドン	1bin malt 1box
8月17日	ロンドン	50tons coals 1malt bin
8月17日	メルボルン	1box
9月23日	ロンドン	1malt bin
11月3日	ロンドン	1bin 20bales

二つの表をもとに「貿易商社」としての「Black and Wright社」の活動を概観してみよう。まず、輸出について。輸出先はほとんどがメルボルンである。メルボルンはオーストラリア南東部のビクトリア州の州都であり、今日シドニーに次ぐオーストラリア第二の大都市である。1830年代以降に本格的な開発が始まり、1850年代の金鉱発見以後、いわゆるゴールド・ラッシュで人口が急増し、一大消費都市として発展した。「Black and Wright社」のメルボルンへの輸出は1855年末から本格

化し、1856年には実に19回も大量の商品を輸出している。

輸出品の中心は、ビールと小麦粉flourだった。1856年1年間だけで、小麦粉は3,000袋近く、ビールは「貿易商社」としての仕事が始まった当初の主力商品で、1855年11月から12月までの7カ月だけで、439樽 (casks), 250箱 (cases), 420包 (pkgs=packages) を輸出している。翌1856年は小麦粉が主力商品になるが、やはりビールも同年1月19日の146樽、2月18日の100樽、1857年1月8日の91樽、同26日の108包といったように、時に大量に輸出されている。

メルボルン以外ではロンドンに向けて羊毛を輸出している。1857年の2回と1858年の1回を合わせて402梱 (bales=bale, 羊毛の場合、1bale がどれぐらいの量だったかは分からない)³⁴⁾。このほか比較的目立つのは、branである。これは小麦から小麦粉を作る際に残る皮のクズのススマのことで、主として家畜の飼料に使われたようだ。輸出のなかで特異なのは最初に出てくるゴール向けの金の輸出だろう。ゴールはスリランカの町である。どういう経緯か分からないが、記録に残る金輸出はこの1回だけである。

次に輸入を見てみる。こちらは積荷の中身が記されていないケースが多いから、詳細は不明だが、相当量の輸入をしていたことは分かる。品物で比較的是っきりしているのは、ロンドンから定期的にモルトを輸入していることだ。いうまでもなくビール製造の材料の一つである。先に倒産事件のことでふれたように、「Black and Wright社」はビール製造会社と取引を持っていた。このモルト輸入はその製造会社に搬入されただろう。そして、製品（ビール）はメルボルンへ輸出されていたのである。

ロンドンからの輸入でほかに品物が特定できるのは石炭である。1856年11月1日に164トン、1857年5月5日に50トン、7月28日に60トン、8月17日に50トン輸入し、この年には2月11日にメルボルンからも60トン輸入している。

輸入のなかで異色なのは、1856年5月31日、シンガポールから4boxes の opium を輸入していることである。アヘンである。もっともこれも輸出の金を同じように1度だけだった。

先に1853年5月3日の「移転通知」を紹介した。繰り返すと、そこには「GENERAL MERCHANT and COMMISSION AGENT」とあった。こうして「Black & Wright社」の輸出入の実際を見てみると、1855年から1857年まで、まさに同社は「GENERAL MERCHANT 総合商社」として、活発な貿易をしていたことが分かる。

ここで、「Black and Wright社」の企業としての発展を間接的にうかがうことのできる記事の一つ紹介しておこう。1857年5月6日付 *South Australian Register* の「THE WATERWORKS CASTINGS」という記事である。人口が急増していたアデレードでは水道施設の拡大が緊急の課題になっていた。記事はこうした状況に関するもので、新たな水道工事の入札応募者とその提示価格が表になっている。「Black & Wright」がそこに登場している。掲示額は86,633ポンド。入札応募者13社のうち、5番目に高い価格だから落札することはなかったようだが、貿易事業とは直接関係ないこうした公共工事にまで「Black and Wright社」は参入しようとしていたのである。まさに「総合商社」にふさわしい。

では、「COMMISSION AGENT」の方は、どうだっただろうか。これもその業務の広がりや *South Australia Register* の紙面からかなり知ることができた。代理業務の対象は二つあった。一つは保険会社の代理店としての業務、もう一つは船舶にかかわる業務代行である。

保険会社の代理店として「BLACK & WRIGHT」が最初に登場するのは、1855年3月1日である。広告欄の「INSURANCE NOTICES」欄にかなりの数の保険会社の広告が並んでいるが、その一つ「PHOENIX LIFE INSURANCE COMPANY and MARINE CASUALTY OFFICE」という保険会社の代理店として「BLACK & WRIGHT」が記されている。フェニックス社は、その名のように、生命保険のほか、海上保険も取り扱っていた会社で、ロンドンとリバプールに本社がある。代理店は「BLACK & WRIGHT」しか記載がないから、南オーストラリア地域を包括する代理店だったのだろう。

同じ広告は翌1856年2月まで多い月では15回、毎月平均的にも10回前後掲載されている。2月も6日から18日まで10回掲載されているのだが、18日を最後にフェニックス社の広告そのものが消えてしまう。ほかに代理店を変えたということではなく、同社が南オーストラリアから撤退したものである。包括代理店としてこの地域の契約を独占的に仕切り、手数料を得ていた「Black and Wright社」にとってはかなり打撃だったと思われるが、あるいは撤退したことを考えると、契約そのものがあまり伸びなかったのかもしれない。

この後、しばらく「BLACK & WRIGHT」は「INSURANCE NOTICES」欄から消えるが、1858年4月7日に「DERWENT AND TAMAR MARINE ASSURANCE COMPANY」という会社の代理店として登場する。広告によると、この会社はタスマニア島のハウバート・タウンにある。この代理店契約は後に述べる「Black and Wright社」の解散（1858年6月24日）まで続く。

もう一つの代理店業務である船舶にかかわる仕事についても、*South Australia Register* の紙面からおおよそそのことが知られる。「SHIPPING INTELLIGENCES」には港に寄港中の船舶の情報が「Vessels in Harbour」欄に毎日載っている。そこには出港地、トン数、船長の名前に加えて、必ず Agent の名前が記載されている。また、乗客と積荷を募る広告が連日、「SHIPPING」に帆船のカット入りで載っている。そこにも申し込み先として代理店の名前がある。

当時、本国イギリスとの交通はもちろん船しかなかったし、オーストラリア各地へも人と物の移動は船が主体だったから、この時期の新聞はこの種の「船舶情報」に大きな紙面を割いていた。むしろ発展する南オーストラリアの中心として、アデレード港は各地との出船入船でにぎわっていた。この地で「commission agent」を営む者にとって、船舶代理店ビジネスはもっとも大きな収入源だっただろう。

「BLACK & WRIGHT」が船舶代理業務の Agent として最初に紙面に登場するのは1955年10月10日と思われる。ケープタウン経由ロンドン行きアイリーン号 Irene の案内広告である。この広告はその後たびたび掲載されるが、アイリーン号の出港は1856年1月第1週が予定されてる。アイリーン号といえば、ブラック夫妻はほぼこの1年前、まさにこの船でアデレードに着いたのだった。この船の代理店になった経緯は不明だが、最初の代理業務の対象としてこの船を選んだブラックの

胸中には、特別な思いがあったかもしれない。

この後、「Black and Wright社」は船舶代理業務を急速に拡大していく。出港船の案内と停泊中の船の一覧中に登場する「BLACK & WRIGHT」は枚挙にいとまがない。アイリーン号の直後（代理店契約は同時だったかもしれない）には、ロンドンから到着した Norma 392トンの代理店としてたびたび紙面に登場する。翌1856年になると、メルボルン航路の Mary Smith 85トン、ロンドン航路の Albert Edward 497トンの代理店もするようになる。同年8月にはリオ・デ・ジャネイロ航路を走る Alarm 199トンとシドニーとの間を往来する John Ormerd 187トンが、これに加わる。さらに11月にはロンドン直航の新鋭船 Edward Thornhill 525トンの代理店にもなっている。こうした業務拡大の結果、同年11月8日の「SHIPPING」欄には、5カ所も「BLACK & WRIGHT」が登場するという状況である。

1857年もほぼ同じ状況が続いている。1月にGeorge Canning 411トン、3月に Guiding Star 700トン、5月に Royal Lily 406トンが加わる。いずれもロンドン航路の船。Royal Lily はカルカットから寄港しているときもある。

このほか、シドニー航路の Adeona 115トン、メルボルン航路の Water Nymph 589トンの代理店としても「BLACK & WRIGHT」の名前がある。ロンドン航路の場合、ひとたび出航してしまえば、数カ月は戻って来ないとはいえ、1856年から57年といえ、先に見たように「貿易商社」としての「Black and Wright社」も大いに盛業だったし、包括代理店をしていたフェニックス社の保険業務もある。「Black and Wright社」は多忙を極めていただろう。

この時期、ブラックは新天地での成功を実感していたかもしれない。

5 「Black and Wright社」——終焉

1854年10月29日にアデレードに到着して以来、ブラックは事業の拡大に全力をあげただろう。それは急な坂を走り上げるようなきついことだったにちがいない。しかし、ここまで見てきたように「Black and Wright社」は短期間のうちに発展を遂げた。アデレードの経済社会の中で、そのプレゼンスは高まっただろう。当然、ブラックその人も実業家として確かな位置を獲得したはずだ。そうしたことを明白に教えてくれる記事が、1857年11月3日の *South Australian Register* に載っている。

「CHAMBER OF COMMERCE」と表題のついた記事が、それだ。「CHAMBER OF COMMERCE」は商業会議所である。前日開かれた商業会議所の定例会の様態を詳細に伝えている。その中で、新しい理事 trustee の選出が報じられている。オーストラリアを離れる理事の欠員を埋めるため選挙で、「投票の結果、Black and Wright社のジョン・レディ・ブラック氏が選ばれた」とある。

商業会議所は地域の有力実業人が集まって構成する団体である。新会員は現会員の投票を経て晴れてメンバーになれる。ちなみにこの日の定例会では12人が新会員に選ばれている。だれでもがメンバーになれるというわけではないのだ。ましてや理事ともなれば、社会的ステータスを伴った

だろう。ブラックは31歳。アデレードに来てからまだ3年しか経っていない。

だが、「若き商業会議所理事」は、ブラックが昇りつめた急坂の頂点だったとっていいかもしれない。先の輸出入の一覧表をもう一度見てみよう。輸出は1858年4月30日のシドニー向けwheat（小麦）が最後である。輸入の方は、新聞がブラックの商業会議所理事就任を伝えたその日、1857年11月3日、ロンドンからおそらくはモルトと思われる「1bin」などで終わってしまう。

保険や船舶の代理店としての業務はその後も少し続くが、それも1958年になると、新聞紙面への露出度は極端に減り、同年前半で終わる。輸出入の実績が無くなってしまったということは、第一義的に「貿易商社」であった「Black and Wright社」の実質的終焉を意味しただろう。

1857年11月の商業会議所理事就任から短い間の暗転である。いったい何が起きたのだろうか。先に《「Black and Wright社」の発見》のいきさつを述べた際に、破産事件に関係した記事にふれた。この破産事件が「Black and Wright社」の終焉と何か関係しただろうか。先にあげた1857年3月21日の記事以外にも関係記事はあるが（3月9日、3月23日、4月18日）、印面がつぶれていて、事件の内容は正確に把握できない。どうやら、大口債権者だった「Black and Wright社」は債権者のリーダーとして動き、ビール製造会社の工場施設の差し押さえなどを図ったようだが、うまくいかなかったらしい。その結果、債権は貸倒れとなった可能性が強い。ただ、この時期以降もまだ「Black and Wright社」の社業は隆盛であり、この事件を「経営悪化」に直接つなげて考えるのは無理があるだろう。

これまでさまざまな「情報」を提供してくれた *South Australian Register* の紙面にも、「Black and Wright社」の終末に至る原因にかかわる記事は、残念ながら見つからない。

ただ、「原因」の方はともかくとして、終末の「様相」をかなりリアルに教えてくれる記事はいくつかある。

まず、1858年6月28日の「PUBLIC NOTICES」欄。「Black and Wright」の名称で商業活動を行っていたジョン・レディ・ブラックとリチャード・ジョセフ・ライト両人は、互いの合意のもとに今日以降、共同経営を解消する、という内容の通知が掲載されている。証人の弁護士の名前が添えられてあり、日付は6月24日。「Black and Wright社」は、この日を持って消滅したのがある。

2人の間に何があったのか、新たな疑問が浮かぶ。興味深いのは「Black and Wright社」が代理店をしていた「DERWENT AND TAMAR MARINE ASSURANCE COMPANY」の広告は、この通知が載った日にも掲載されていて、そこにはまだ「BLACK & WRIGHT」がそのままになっているのだが、6月30日以降、Agent が「RICARD J. WRIGHT」になっていることだ。「Black and Wright社」は解散したが、この保険代理業務はライト1人が受け継いだことになる。

次に「競売」関係の記事をいくつか見出すことができる。最初は1858年6月2日、ブラックの家財道具の競売が告知されている。「E. SOLOMON & CO」というオークション業者³⁵⁾が「J.R. Black Esq.」から「本日正午から彼のエンフィールドの自宅で（次の品物を）売るように指示を受けた」とあって、以下、家財道具が列挙されている。大きな活字で書かれた Collard 製の美しいピアノとマホガニー製のサイドボードが「目玉商品」らしい。「Collard」は今日でもアンティーク・

ピアノとして人気がある Collard & Collard 社製のピアノと思われる。ブラックの妻エリザベスの持ち物だったのだろう。そのほか、椅子、陶器、コップ、ディナー用食器一式その他いろいろ、要するに「金目」の家財道具すべて、という感じである。

9月28, 29, 30日には、30日に行う事務所備品の競売も告知されている。場所は「BLACK & WRIGHT社の元の事務所」である。ここでも列挙されているのは、椅子、机、引き出しなど、およそ事務所にあると考えるられるものすべてとっていい。こうして競売されたことから考えると、これら事務所備品はブラックの個人所有物だったと思われる³⁶⁾。二つの競売によって、ブラックは、いわば身ぐるみをはがれてしまったのである。

最後の競売は船舶である。7月、9月、10月にそれぞれ数回ずつ、「ADEONA」の競売が告知されている。「Black and Wright社」の船舶代理店業務にふれた際に登場したシドニー航路の115トンのAdeonaである。「Black and Wright社」は代理店として多くの船に関係したが、ほぼ最後の時期に代理店業務を行っていたこの船は、どうやら自社所有船だったようだ。競売の対象は船だけでなく、200トンに及ぶ積荷も対象になっている。最初の競売は7月29日に行われたが、売買は成約に至らなかったのか、9月と10月にも同じかたちの告知広告が出ている。

半年前には商業会議所の新理事に選ばれたブラックは、わずかその半年後に家財道具一式、事務所備品、持ち船まで競売される事態になってしまった。ここに紹介した競売広告は、ブラックが直面した悲劇的状况を十分に教えてくれる。

ふたたび、ここで「なぜ？」の疑問がわき起こってくるのを止めることができない。しかし、実証的な史料がない以上、残念ながら何もいえない。いまいえることは、1858年の早い時期、ブラックのすべての事業を瓦解に導く何ごとかが起こっただろうということだけである。

6 「歌手ブラック」——人気と賞賛

「Black and Wright社」の経営者ジョン・レディ・ブラックは1858年を境にして、以後その姿を消す。アデレード在住の協力者を得て、現存する当時の各種人名簿（Directory）を調べた。次はその結果である。

年	タイトル	記載の有無と内容
1854	Garran*	なし
1855	Garran: p5. Adelaide Directory Section	Black & Wright, Exchange-buildings, and Currie-street
1856	Young **: p4. Commercial Directry Section	Black & Wright, Merchant, Grenfell-street
1858	Howell ***: p4. Adelaide Directory section	Black & Wright, Merchant, Grenfell-street

* Garran, A, *The Royal South Australian book and general directory*, ** Young, *Adelaide City and Port commercial directory and almanac 1856*, *** Howell's *directory for the city & port of Adelaide, and South Australian almanac for the year 1858*

1857年に関しては人名簿類は存在しないようで、1859年以降、確実にブラックがオーストラリ

アを後にしたと思われる1863年まで調べたが、1858年の記載の後、ブラックは見つからなかった。*South Australian Register* の紙面で明らかになった「Black and Wright社」の活動期間とぴったり一致する結果である。

「実業家ブラック」に変わって姿を現すのは、「歌手ブラック」である。ブラックが歌手としての才能を持ち、来日後もときにそれを披露したことは、これまでの文献でふれているものもある。オーストラリア在住中についても、先に「商業活動に従事したが成功せず、金鉱のコンサート歌手をしていたとも伝えられる」という記述を引いた（注30参照）。だが、いずれにしる根拠になる史料が示されているわけではない。

商売に失敗した末、「金鉱のコンサート活動をしていた」といわれると、何か「うらぶれたドサ回り」という感じがしてくる。この「感じ」は正しいだろうか。オーストラリアにおけるジョン・レディ・ブラックの軌跡を追究してきた本稿の最後に、「歌手ブラック」の実像に迫って、いちおうの締めくくりとしたい。この点でも新聞史料はいくつかの貴重な「情報」を提供してくれた。

「歌手ブラック」の姿を最初に、しかし、はっきりと教えてくれるのは、1858年7月26日付*South Australian Register* である。「Black and Wright社」の解散が告知されたのが、6月24日。それに先立ち、ブラック家の家財道具が競売に付されたのが、6月2日。ブラックは「歌手」として生きる道を選んだのだろうか。

記事は、South Australian Institute という組織が主催して、7月28日に開く「LECTURE AND CONCERT」を告知したものである。講演をはさんでコンサートは1部と2部に分かれていて、「Mr. J.R.Black」は両方に登場している。ブラックは、1部でSchubert の“The Wanderer”と Irish Ballardの“Barny O’Hen”，第2部で Irish Ballard の“The Harp that Once”と Scoch Song の“‘There’s nac huck about the House”，“Allister McAllister”を歌うことになっている。コンサートの演目は全部で9つあるが、このうち5つがブラックの歌であり、Soch Song の2曲はプログラムの最後に歌われている。このコンサートはブラックが中心だったことは明らかである。

コンサートの翌々日26日の紙面にかなり長文の批評が載った。筆者はブラックに対していくぶん辛口である。シューベルトの歌曲に関しては「われわれの好みには合わないが……」とし、Irish BallardとSoch Songについても「(曲に) 大変ふさわしいかたちで歌われた」と書くにとどめている。ただ、ブラックが最初からアンコールが求められたことや、Irish BallardとSoch Song については「満場の聴衆の称賛を得た」とも記している。どうやら、筆者はブラックが自己流の歌い方をしたドイツ歌曲には否定的だが、情感豊かに歌うブラックの「民謡」には大いに心を動かされたようだ。

これ以外には、いまのところ、*South Australian Register* にブラックの歌手活動に関する記事を見つけていない。かわって、次に「歌手ブラック」が見出される新聞史料は、ニュー・サウス・ウェールズ州の州都シドニーで発行されていた *Sydney Morning Herald* の1859年12月27日紙面である。この後、「歌手ブラック」が登場するのは同紙のほか、クィーンズランド州の州都ブリスベーンで発行されていた *Moreton Bay Courier* (後に*Courier*) とタスマニア島で発行されていた *The Mercury*,

Launceston Examiner の3紙に限られる。むろん、「データベース化された新聞」という基本的な制約の結果である。その意味で、これらの新聞史料は「歌手ブラック」の活動のごく断片を示すものにすぎない。だが、それでも、ここにはこれまでまったく知られていなかったオーストラリアにおける「歌手ブラック」の姿を垣間見ることができる。

「Black and Wright社」を解散したブラックはある時期、アデレードを離れ、シドニーに移り住んだようだ。この地を拠点にタスマニア島を含むオーストラリア南東部の諸都市でコンサート活動を行っていたと思われる。

Sydney Morning Herald の1859年12月27日紙面は、この週毎夜行われるブラックの「a new Christmas entertainment」を紹介している。この記事を読むと、ブラックは単に歌を歌うだけではなく、ミュージカルふうの小ドラマも行ったようだ。「高名な声楽家 eminent vocalist」という表現がある。

Moreton Bay Courier には、まず1860年6月19日から10月6日まで8回、「歌手ブラック」が登場している。この期間にハウバート・タウンでかなりの回数行われた公演に関係した記事、広告その他である。6月19日は「Local Intelligences」欄で、かなりのスペースを割いて、ブラックの来演を取り上げている。最初に「わが植民地におけるもっとも偉大な声楽家の1人」として、ブラックを紹介している。ブラックがイングランド、アイルランド、スコットランド、ドイツなど各地の歌を巧みに歌うことにふれた後、彼が「Scotchman」であることを指摘し、スコットランドの輝かしい吟遊詩人の詩歌を歌うところにブラックの本領があると述べている。

公演はいずれもブリスベーンの Scool of Arts のホールで行われ、公演の告知はかなり大きなスペースを割いてたびたび掲載されている。

公演の「大成功」を伝える記事のほか、興味深いのは9月19日に載った「Complimentary Benefit TO MR. J. R. BLACK」と表題のある告知である。クィーンズランド州知事の協賛も受けたことが記されていて、65人が連名で、近くクィーンズランドを離れる予定のブラックに対して、「ぜひ少なくともあと一回の公演をしていただきたい」と求めたものである。これを受けたブラックの回答と、この要請を受けた特別公演の告知も一緒に掲載されている。名前を連ねた人々はブリスベーンをはじめクィーンズランド州の有力者にちがいない。どうやら、ブラックはブリスベーン公演で、聴衆の熱狂的支持を得たようだ。

Moreton Bay Courier の後継紙 *Courier* の1861年5月14日に載った記事は、この時期、やはりブリスベーンであったブラックの公演に関係したものらしく、「すべての新聞で誇大ともいえる賞賛 (puffs) を得ることに不思議なほどうまく成功している、すばらしいブラック」と書かれている。

The Mercury の記事は1861年6月14日から9月13日まで8回、ハウバート・タウンほかで行われた数回のブラックの公演に関連して出ている。*Launceston Examiner* の1861年8月17日と22日の2回の記事も同様である。*The Mercury* の記事8回のうち7回は「MR. J. R. BLACK」という本文より大きな活字を使った表題がついている。

この一連の記事には、「さよなら公演」あるいは「最後の公演」といった表現がたびたびある。

ブラックがオーストラリアを離れた時期を考えるうえで、参考になろう。9月13日の記事には「今夜の公演がハウバート・タウンにおける最後の顔見世であると本人がいつている」とあって、「この市におけるブラック氏の友人と敬服者たちは、彼のすばらしい喜びに満ちた公演に接する機会はない」と記している。

ハウバート・タウンに先立ち、シドニーでは1861年4月に「さよなら公演」が行われたようで、これに関する記事が *Sydney Morning Herald* の同月23日に出ている。「公演はいつもよりさらに魅力的であり、歌われた歌の多くが繰り返し賞賛の嵐を引き出した」とある。

以上、駆け足で、「歌手ブラック」に関する新聞史料を紹介してきた。ここには「金鉱のコンサート歌手」はいない。最大級の人気と賞賛を得た1人の歌手がいた。

先に記したように、「さよなら公演」の時期から考えて、ブラックがオーストラリアを離れたのは1861年中だったと思われる。行く先は、どこだったのか。おそらく、インドを経て中国にわたっただろう。その先に幕末の日本があった。

その地で「ジャーナリスト・ブラック」が誕生するのは、もう少し先のことである。

¹⁾ Kanesada Hanazono, *Journalism in Japan and its Early Pioneers*, 大阪出版社, 75ページ。本書は、奥付に『日本の新聞と其の先駆者』という書名が表記されている。英文で書かれた近代日本ジャーナリズム史の先駆的な著作といていい。同書の第11章がブラックに割かれている。「はしがき」(筆者は、早稲田大学教員のRaymond Bantock)によると、花園は早稲田大学を卒業して *The Japan Times* などの英字新聞を経て、1918年に東京日日新聞社に入り、1921年から2年間、米国特派員を経験した。帰国後、「英文毎日」の創刊にかかわり、同紙の記者を務めた。

²⁾ ジョン・レディ・ブラックの伝記的事実の解明をめざす一環として、私はすでに「来日以前のジョン・レディ・ブラック——オーストラリア移住まで」(町田市立自由民権資料館紀要『自由民権』第24号, 2011年3月)を書いた。本稿は実質的にこの拙稿の「続編」をなすものであるが、以下、自由民権運動のかかわりに関する部分など、拙稿とごく一部重複した記述がある。単独の論文として読者の理解を図るためであり、この点ご寛容いただくとともに、この別稿を合わせてお読みいただければ幸いである。

³⁾ 協定(「定約ノ条例」)の内容は、浅岡邦雄「『日新真事誌』の創刊者 ジョン・レディ・ブラック」『参考書誌研究』第37号(国立国会図書館資料部, 1990年)44~5ページ参照(原史料は、国立公文書館蔵『公文録』左院之部 壬申十月至十一月)。

⁴⁾ 土屋礼子編著『近代日本メディア人物誌——創始者・経営者編』(ミネルヴァ書房, 2009年)。

⁵⁾ 土屋礼子編著, 前掲書, 11ページ。

⁶⁾ 前掲同書, 11ページ。

⁷⁾ 前掲同書, 12ページ。

⁸⁾ 前掲拙稿「来日以前のジョン・レディ・ブラック——オーストラリア移住まで」。

⁹⁾ 「十大先覚記者」は、ブラックのほか、岸田吟香、柳河春三、福地桜痴、栗本鋤雲、成島柳北、藤田茂吉、末広鉄腸、沼間守一、福沢諭吉である。本書の執筆に際して草稿を書く複数のメンバーがいたようで、前掲英文著作を書いた花園兼定は、ブラックに関する史料収集にあたった。本書のブラックに関する記述は彼の「材料」提供によるものと思われる。

¹⁰⁾ 大田原在文『十大先覚記者伝』（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、1926年）151～2ページ。「石井ブラック」は後に「快樂亭ブラック」の名で落語家として活躍した長男ヘンリー・ブラックである。彼は「石井アカ」という女性と結婚し（後に離婚）、日本国籍を取得した。小島貞二『快樂亭ブラック伝』（恒文社、1997年）145～155ページ。

¹¹⁾ たとえば、後にロマン派の詩人として知られることになるサミュエル・テイラー・コウリッジ（1772～1834）は、1781年にクライスツ・ホスピタルに入り、1791年、ケンブリッジ大学ジーザス・カレッジに進んでいる。

¹²⁾ 土屋礼子編著、前掲書、12ページ。

¹³⁾ 前掲拙稿、50～55ページ。

¹⁴⁾ イギリスでは各種史料のデータベース化が飛躍的に進み、教区教会の生誕・洗礼・結婚などの記録、1841年から10年おきに行われたセンサスの記録などがインターネットを通じて検索・プリントできる（有料の登録が必要）。「ジョン・ブラック」を含めて、以下にふれるセンサス類の記録は、Ancestry. co. uk <http://www.ancestry.co.uk/> を通じて入手したものである。

¹⁵⁾ ブラック本人と同名の父親の海軍軍歴をはじめとした履歴に関しては、前掲拙稿でくわしく検討した（51～53ページ）。

¹⁶⁾ 「General」とあるので、特定の代理店業務ではなく、さまざま業務を請け負っていたのだろう。後に述べるように、オーストラリア移住後のブラックは保険会社や船舶の代理店業務を展開している。おそらく、グリニッジ在住時にも同じような仕事をしていたのだろう。

¹⁷⁾ エリザベス・シャーロツテ・ベンウェルは、Ancestry. co. uk を通じて入手した教区教会の記録によると、1829年4月23日、グリニッジで生まれている。

¹⁸⁾ ブラックの出自に関しては、別稿でくわしく検討した。父ブラックはエスクワイア Esquire の称号を持っており、ブラック家は地域の有力名望家だった（前掲拙稿、3～7ページ）。

¹⁹⁾ 1854年10月30日付 *The Adelaide Times* の「SHIPPING INTELLIGENCES」欄に載ったアイリーン号の乗客名簿に「Mrs（「Mr」の誤記）and Mrs Black and female servant」とある。ブラック夫妻は女性使用人1人を伴っていたのである。アイリーン号のロンドン出航は7月26日になっている。同日付 *South Australian Register* の「SHIPPING INTELLIGENCES」欄にもブラック夫妻は出ていて、こちらは「誤記」はない。

²⁰⁾ 以下、オーストラリアの歴史に関する記述はごく一般的な概説書の範囲を出ない。たとえば、藤川隆男編『オーストラリアの歴史——多文化社会の歴史の可能性を探る』（有斐閣、2004年）がある。

²¹⁾ Whitelock, D, *ADELAIDE 1836–1976 A History of Deference*, University of Queensland Press, 1977, 21ページ。

²²⁾ 以下、初期アデレードの植民地形成過程に関しては、Colwell, M & Naylor, A, *ADELAIDE AN ILLUSTRATED HISTORY*, Lansdowne Press, 1977, 10～27ページ。

²³⁾ Colwell, M & Naylor, A, *op.cit.*, 20ページ。

²⁴⁾ Whitelock, D, *op.cit.* 37ページ。

²⁵⁾ Measuring Worth <http://www.measuringworth.com> というウェブサイトによると、GDP deflator（消費者物価全般の値上がり）に基づく計算では、1854年の2,000ポンドは2000年の164,000ポンドに相当するという。ちなみに、1ポンド150円で換算すると、24,600,000円である。

²⁶⁾ 1852年7月10日付 *Fifeshire Advertiser* の「Marriages」欄に父ブラックと陸軍少佐フルトンの末娘エマの結婚が記載されている。また1851年センサスによると、エマは東インド生まれで、このとき21歳である。

²⁷⁾ Whitelock, D, *op.cit.* 77ページ。

²⁸⁾ Whitelock, D, *op.cit.* 216ページ。

²⁹⁾ 原史料は、Annie の誕生 = District of Adelaide Birth 1856-1857 Book 7 B Fiche 4/38, 同死亡 = District of Adelaide Birth 1856 Book 5 p1-22 Fiche 1/21, Henry James の誕生 = District of Adelaide Birth 1859-1860 Book 15 Fiche 1/21。

³⁰⁾ 土屋礼子編著, 前掲書, 12ページ。

³¹⁾ 「Black and Wright社」となっていることから、ライトがブラックの共同経営者だったことは確かだろう。だが、経営の中心はブラックだったと思われる(注36参照)。根拠はないが、私は、ロンドンで事業をしていたブラックが(たぶん彼より年少の)ライトと知り合い、資金その他は自分が持つから、というかたちで、アデレード行きを持ちかけたのではないかという気がしている。ブラックは妻と使用人女性を伴っているのに対して、ライトと思われる乗客名簿の「Mr Wright」は単身である。最初の商品をアイリーン号にかなり積み込み、アデレード到着後1カ月ほどで事務所・店舗を構えて大々的に「店開き」するにはかなりの資金が必要だっただろう。「世襲財産2,000ポンド」を失っていたはずのブラックに、そのような資金調達が可能だったのだろうか。この問いに対する「実証」的な答えはない。私としては、そこに父ブラックの存在を想像するのみである。なお、フルネームの誤りは後に本文でふれる「Black and Wright社」の解散通知から明らかになる。

³²⁾ 「ELECTRO PLATE」は、実のところどんな商品がよく分からないのだが、メッキをほどこした平板ではないかと思われる。

³³⁾ *South Australian Register* の紙面は活字が小さいうえに印面がつぶれている部分も少なくなく、相当に読み取りにくい。見出しもないままベタに活字が組まれた一覧記事の中に「Black and Wright」が別のところに複数出ているケースもある。コンピュータの画面で拡大するなどして「解読」に努めたが、遺漏がまったくないとは言い切れないことをお断わりしておく。

³⁴⁾ イギリス本国への羊毛輸出は南オーストラリアの重要産業の一つだった。1857年3月30日付 *South Australian Register* の「The Register」欄に「われわれの羊毛輸出」という論説が出ている。そこには、1856-7年シーズンにおける南オーストラリアの羊毛輸出に関して、業者別のリストが載っている。全体で17,711balesで、トップは「Elder, Stirling, & Co.」の5,013bales。「Black and Wright社」は219balesで20位に入っている。この219balesは輸出一覧の1857年1月6日分だろう。

³⁵⁾ 「E.SOLOMON & CO」は連日の紙面で数多くのオークションを告知しており、アデレード最大手のオークション業者だったと思われる。ブラックにかかわる競売はすべて、同社が扱っている。

³⁶⁾ 「Black and Wright社」は連名になっているが、「経営の中心はブラックだったと思われる」と先に記した(注31)。商業会議所の理事になったのはブラックだったし、事務所備品がブラックの個人所有だったと思われることから、この点はうかがえる。

補注・ブラックの来日時期は従来、「文久2(1862)年ないしは文久3(1863)年」とされている。本稿脱稿後、筆者は1863年に彼がインドに滞在していたことを示す資料に言及した研究に接した。この研究の吟味を含めて、ブラックの来日時期の検討は他日を期した。

《追記》筆者は2009年4月からイギリス・ケンブリッジ大学アジア中東学部訪問研究員として在外研究中である。本稿は在外研究の成果の一部である。在外研究の機会を与えていただいた法政大学社会学部教授会に記して謝意としたい。